

〈研究ノート〉

『キリスト元型』と心理療法

山 愛 美

本稿は、キリストの^{せい}生について Jung 心理学の立場から論じた『キリスト元型 The Christian Archetype』(Edinger, E. F 著1987年に Inner City Books より出版)を紹介し、心理療法と結びつけて考察することを目的としている。まず著者について、それから原著の成り立ちについて述べる。

1. 著者 Edinger について

『キリスト元型 The Christian Archetype』の著者 Edinger (1922-1998)は、インディアナ大学とイェール医科大学で学び、精神科医になった後、ユング派の分析家となった。彼は、ニューヨークのユング研究所の創立メンバーの一人として、またユングトレーニングセンターの所長としても活躍した。その後ロスアンジェルスで開業し、ユング研究所で講義を行い、アメリカ合衆国の Jung 派の理論家として指導的な存在となった。

著書には、『自我と元型 Ego and Archetype』や『心の解剖学 Anatomy of the Psyche』を初めとして、キリスト教や聖書に関するもの、錬金術に関するもの、古代ギリシャ哲学やグノーシス主義に関するもの、ゲーテの『ファウスト』やメルヴィルの『白鯨』をユング心理学の視点で読み解いたものなど多数ある。

また研究所で行われた講義についても、後に編纂されて出版されている。特に Jung が1944年に大病をした後の、晩年の著作『転移の心理学』(1946)、『アイオーン』(1951)、『結合の神秘』(1955・1956)、それぞれについての講義を編纂して出版された『The Mystery of the Coniunctio — Alchemical Image of Individuation 結合の神秘 — 個性化の錬金術的

イメージ — 』(1994), 『The Aion Lectures — Exploring the Self in C. G. Jung's Aion アイオン講義 — Jung のアイオンの中に自己を探る — 』(1996), 『The *Mysterium Lectures — Journey through Jung's Mysterium Coniunctionis* ^{ミステリウム} 神秘講義 — Jung の結合の神秘の旅』(1995)は、我々が Jung の原著を理解する上で大きな導き手になる。

これら Jung の著作はきわめて難解で、キリスト教や象徴体系について、神話、古代の思想や錬金術、グノーシス主義、ヘルメス哲学などの知識、そしてラテン語やギリシャ語の語学の知識なくしては到底読みこなすことはできない。その上、何よりも心的事実を大切にしながら展開していく Jung の文体に、いわゆる一般的な意味での知識だけではなく、我々読者が自らのイメージする力を働かせながらどのくらいついて行けるか、という独特の能力が求められる。晩年の著作ほどこの傾向は強くなる。にもかかわらず、これらの著作は Jung を理解する上で重要な意味を持っており、ユング心理学の真髄をなしているとも言える。

ところで、Edinger の講義は、Jung の述べていることをただ噛み砕いて説明するというものではない。むしろ Edinger 自身が、分析を通しての経験、自分自身の心的な体験、加えて豊富な読書や研究による豊かな知見を余すことなく駆使しながら、さらに連想を拵げているものである。それは、Edinger という土壌に Jung の述べたことを種子として蒔き、そこに育ってきたものを、Edinger が自分の言葉で語っているかのような印象がある。確かに Jung の著作を基にしているのだが、それを Edinger がいったん自分のものにして読み解いているため、単独の読み物としても十分に価値がある。

本稿で取り上げる『キリスト元型』は、Jung の考えに沿ってキリスト神話についての解釈を提示しようとするものである。しかし上述したように、本著も単なる Jung の考えの紹介にはとどまっておらず、Edinger 自身による肉付けがなされている。

2. キリスト神話

まず、Edinger が要約したキリスト神話を記しておく(以下太字は本文からの引用)。

神の先在の、唯一の息子は、自分から神性を取り除いて自分を空にし、人間として受肉するのだが、それは聖霊の働きによるものであって、聖霊が処女マリアを孕ませるのである。彼は卑しい環境に生まれ、神靈的な出来事が引き続いて起こり、最初の重大な危険を生き延びる。成人に達すると、洗礼者ヨハネの洗礼を受け、彼の使命を知らせる聖霊の降下を目撃する。悪魔の誘惑を生き延びて、聖職者となり、慈悲深く愛情のある神を宣言し、「天の王国」の到来を告げる。疑念に苦しんだ後、定められた運命を受け入れて、なされるがままに、連行され、裁きを受け、鞭打たれ、嘲られ、十字架にかけられた。多くの目撃者によると、墓に入って3日後に彼は蘇った。40日間、彼は弟子とともに語り歩き続け、その後昇天した。その10日後、五旬節に、聖霊、約束の救い主が、降下した。

Edinger は、このキリスト神話を構成する一連のイメージとして次のような14のイメージを取り上げている。長い年月を経る中、これらのイメージは結晶化されていったのである。

1. 受胎告知
2. 降誕
3. エジプトへの逃亡
4. 洗礼
5. 凱旋入場
6. 最後の晩餐
7. ゲッセマネ
8. 連行と裁判
9. 鞭打ちと嘲り
10. 磔
11. 悲嘆と埋葬
12. 復活と昇天
13. 五旬節(聖霊降誕祭)
14. 聖母被昇天とマリアの戴冠

1の受胎告知も13の五旬節もいずれも精霊の降下という同一のイメージであり、1から13までのイメージはサイクルをなし、これは「受肉のサイ

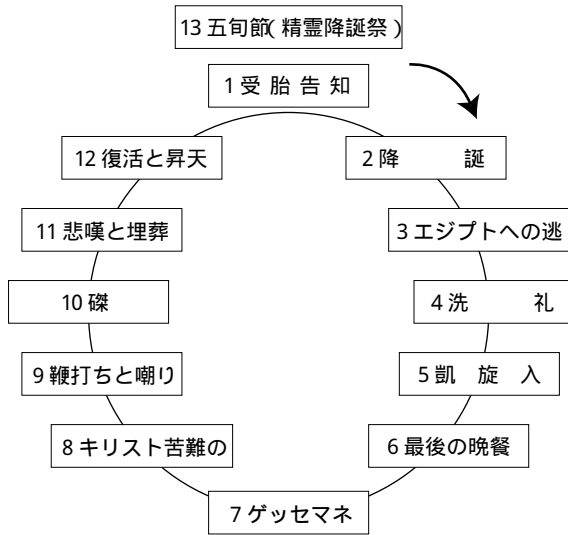


図1 受肉サイクル

クル」と呼ばれている(図1)。Edinger はこれら14のイメージについて、それぞれ章を立てて述べている。

3. 『キリスト元型』の成り立ち

本著の序の冒頭に、Jung の著書『心理学と宗教』からの次のような引用が記されている。

キリストの元型的な生のドラマは、より高次の神意によって変容を被った人間の、意識的な生活と、意識を超えた生活に起こった出来事とを、象徴的なイメージで描写している。

これに続き、Edinger は以下のように述べている。

キリストの生は、心理学的に理解すると、自己が個人の自我に受肉して変化していく様子と、自我が神のドラマに参加して変化していく様子とを再現している。言い換えれば、キリストは、個性化の過程を再現している。この過程が個人に降りかかると、救済にも惨事にもなる。教会とか宗教的な教義の中に含まれている限り、直に体験するという危険からは守られる。しかしひとたび宗教的神話という容器から飛び出してしまうと、個性化の候補者となるのである。

『キリスト元型』では、キリストの生の中に個性化の過程を読み取る試みがなされる。個人が如何に個として生きるのか。もちろんこれは我々人間すべての問題である。しかし、ここで言っているのは、一般にいう「どう生きるのか」という問いとは異なるということを知っておかねばならない。まず、始まりに「私ありき」ではない。前提として私という存在があって、その私がどう生きるのか、というのではないのだ。初めにあるのは自己、つまり全体性。そこからまず自我の萌芽が生じ、その自我がどのように受肉されていくのか、なのである。視野が個人の生に限定されていない。自我の誕生のプロセスは、錬金術の用語では、凝固(coagulatio)——固めること——。全体性の元型である自己から、自我という一つの形ある具体的な存在としての個が創り上げられていく過程が問題となっている。

そして、「キリストの生は……自己が個人の自我に受肉して変化していく様子と、自我が神のドラマに参加していく様子を再現している」とある。これは、同じプロセスの中に二つの側面を見ている。天上の視点と地上の視点とでもいえようか。ここで、『転移の心理学』(1946)でユングが引用している、次のような錬金術の有名な一節が思い出される(Atanasius Kircher, 1652 ただし古書であるため原典を当たるのは不可能)。

上なる天

摑

Edinger (1985) 『

』

「
繫

」

「 . 」

「 」

「 」

「 . 」

『 』

.

「

」

して、「教会とか宗教的な教義の中に包まれている限り、直に体験するという危機からは守られる。しかしひとたび宗教的神話という容器から飛び出してしまうと、個性化の候補者となるのである」とある。

上述したキリスト神話の一連のイメージは、何世紀にもわたりキリスト教芸術の中に繰り返し取り入れられて来ている。多くの芸術家たちが、それぞれのイメージをテーマとした絵画を描き、造形作品を創って来た。音楽家の手によって多くのミサ曲が書かれ、演奏されても来た。これらの作品は、繰り返し人々の目に触れ、耳に入って来た。こうして芸術と宗教は一体となり——元来これらは渾然一体だったわけだが——、人々の心の奥深くにキリストの生の一連のイメージをしっかりと刻み込んで来た。つまり、教義を知的に理解するだけでなく、これらのイメージは人々の体を通して知らず知らずのうちに浸透していたのである。

教会や宗教的な教義の中にユング心理学でいう元型的なものが収まっており、キリストが代表として体験してくれるので、その中にある限り、個人が直に元型的な緒力を体験することは免れる。教会や教義は、「守護符」であり、要はお守りである。

もちろん、西洋社会においても、今日ではかつて教会やキリスト教神話が担ってきたこのような役割を果たすことは、もはや期待できない。そこで、「ヌミノースなものが新たな受肉を探し求めている」とEdinger(1987)は言う。これらの受肉されたものの断片を、現代の個人の夢の中に見出すことが出来る。その意味をきちんと捉えて、生き抜くだけの力のある人は、取り組めばよい。もちろん文学作品、芸術作品の中にも、表現されている場合もある。一見「惨事」と見られてしまいがちな事件や病気の場合も、同様の意味を持つこともある。それがどのように体験されるかによって、「救済にも惨事にもなりうる」のである。そして、もちろん軽々には言えないが、不特定の群衆に降りかかるものとして、ある種の自然現象や社会現象と言われるものの中にもそのような断片が確かに見られる。

Jung (1957)は、「我々は、『神の変身』^{カイロス}の時に生きている」と言う。神は新しいからだ・かたち・すがた 体 を探し求めている。Edingerはキリストの生を偉大なる受肉の神話と捉え、それを吟味することで、そこに何らかの示唆を見出そうとしているのである。

ところで、ヨーロッパにおけるキリスト教のように、特定の宗教が守護符の役割を担って来なかった日本においてはどうなのであろうか。

かつて、我々は自然の中に人間の力を超えた圧倒的な力を見て畏れてきた。日常生活の中でも、例えば、何／誰に対して言っているのかは分からないもの、「ご馳走様」、「頂きます」と言った。「罰が当たる」という時、罰を当てる主体は一体誰なのだろうか。昨今の流行語である「もったいない」には「過分のことで恐れ多い」という意味もあるが、誰／何に対して恐れ多いのだろうか。「ありがとう(有難う)」にはいわゆる感謝の気持ちだけでなく、さらに「またとなく尊い、もったいない、恐れ多い」という意味もある(『広辞苑』より)。いずれも背後には何者かに対するの恐れがある。この何者かは、特定の宗教における神というのではなく具体的な名を持たない。木に宿る神、水に宿る神、火に宿る神等などそこかしこに偏在する、汎神論的な存在である。

これらの神々は皆、「今・ここ」にある、我々が現実だと思っている眼前の世界の住人ではない。そして、もしそこに適切なエネルギーが注ぎ込まれるならば、この世界を開き、向こうへと誘う存在である。そして、ほんの一世紀前には、まだ存在していた妖怪や、鬼、天狗、河童なども、ゲームの中やインターネット上のヴァーチャルな世界へと居を移し、「神隠し」などの一種の装置もすっかり廃れてしまった。

かつては至るところで見られた、向こうへの入り口は、実は今もそこにあるのだが、もはや人の目に留まらなくなってしまった。西洋とは異なる歴史を歩んできたが、やはり日本においても、ヌミノースなものの受肉はこれからの重要な課題である。

図1で受肉のサイクルを示したが、最初の受胎告知の後キリストが生まれた。そしてキリストの死があり、五旬節(精霊降誕)、つまり二度目の受胎告知の後に教会が生まれた。そしてその教会も歴史的な経過の中、で今再び死に向かって進んでいると言う。

プロセスの集合的な担い手としての教会の死は、この元型的なサイクルを心理学的に理解する道を開き、その象徴体系を個人に移すのである。

これが、Jungのいう「持続的な受肉」である、

このサイクルが一人の人間に起こったことを表わしていると捉えれば、それは自我が意識に近づく過程を描写していることになる。しかし、それが人間に受肉した神に生じたことを表わしていると捉えれば、それは神の変容を描写していることになる。

代表してキリストがこのプロセス担い、亡くなった後、集合的な担い手としての教会が死ぬ。そしてその次には、サイクルは我々個人に起こる。これを我々は意識的に経験せねばならないのである。

参考文献

- Edinger, E. F. (1985) : Anatomy of the Psyche—Alchemical Symbolism in Psychotherapy, Open Court Publisher Company. [岸本寛史・山愛美訳 (2004) : 心の解剖学. 錬金術的セラピー原論. 新曜社.]
- Edinger, E. F. (1987) : The Christian Archetype. Inner City Books.